
クロイツェル・ソナタ・ソナタ・ソナタ 旧盤

一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロイツェル・ソナタ・ソナタ・ソナタ 旧盤

【Nコード】

N04950

【作者名】

一平

【あらすじ】

画家を目指す主人公・京田祐が、芸術家集団「総新会」との関わりを通して成長していく物語。

幻視（前書き）

主人公は絵を描きますが作者は絵を描いたことがありません。
作中で語られる作品は実在したりしなかったりします（あとがき
に明記します）。

若干ファンタジーに傾くかもしれませんが。
何か看過できない間違いなどありましたら是非ご指摘ください。

幻視

その足取りに、僕は足を止めた。

軽やかでどこか危なっかしいそのステップ。

少女は大きな交差点の一角で舞っていた。

真っ白いワンピースを着て、真っ赤な帯を持って。

数分間、僕は目を奪われて一歩も動かなかった。

少女は軽やかに、と言うよりほとんど力なく一回転して、そのまま倒れた。

少女の体が倒れるその長い一瞬、僕は彼女と目が合ったと思った。

その顔はほとんど真剣な無表情だったが、喜びの色が見えたような気がした。

体には全く力が入っておらず、無抵抗に地面に引き寄せられて消えた。

僕の周りには人ごみと喧騒が帰ってきた。

少女も、帯も、ワンピースも、一切は消えて帰宅ラッシュになった。

僕はあの舞を何度も頭の中で繰り返しながら帰途についた。

僕はよく幻覚を見る。

物心ついた頃から見ていたと思う。

それが幻視だと気づくには時間がかったし、他の人には見えな
いと気づくにはもっと時間がかかった。

今ではほとんど考えもしないことだが、なぜ自分にだけそんなもの
が見えるのかは分からない。

両親も幻覚など見たことがない。

病気を疑われて病院に通ったこともあるが、状況は変わらなかった。

僕は東京で、あるおばあさんの家に下宿していた。

親戚だが、どういふ血縁関係なのかは知らない。

上田清子という名前で、周囲からはキヨさんと呼ばれていた。

僕もそれに習ってキヨさんと呼んでいた。

キヨさんの夫は亡くなっており、一人暮らしは寂しいからと言うので僕を住まわせてくれた。

階段の上り下りが億劫で二階を使わないというので、僕は二階全体を自由に使っていた。

帰ると僕はすぐに部屋にこもった。

さっきの少女の姿を一刻も早く絵にしようと思った。

何度も頭の中で繰り返し返しているあの舞を何枚かのデッサンにし、構図を決めた。

キャンバスはF150号を使うことにした。

普段はほとんど使うことのない大きさだが、公募展に応募するときにおうと買っておいたものだ。

このとき僕はほとんど確信を持っていた。

それまでも幻視を絵にしたことは何度もあったが、この絵がその中で最も良い絵になると信じていた。

幻視（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

書き始めたばかりなので更新はかなりゆっくりになるとは思いますが、お付き合いいただければ嬉しいです。

忘れ得ぬ女

本当に画家になりたいと思ったのは高校一年生のときだ。

僕はロシア印象派の絵を集めた展示を見に行った。

その中の一枚、イワン・クラムスコイの『忘れ得ぬ女』という作品
正式には『見知らぬ女の肖像』というが、日本ではこう呼ばれる
を見たとき、何の根拠も推論もなかったが、これは幻視を絵
にしたのだと思った。

当時僕は、幻視を絵にするのを控えていた。

できるだけこのことを人に知られないように生きていた。

説明するのが面倒だったし、いちいち異常者扱いされたり精神科に
行けなどと言われるのが苦痛だったのだ。

でも僕は、『忘れ得ぬ女』を見て以来、自分が描きたいと思ったも
のは例え幻視でも描くようになった。

それが何かと聞かれればただの思いつきと答えるようにした。

コンセプトはと聞かれればでっち上げた。

それでも、僕の絵は注目されるようになった。

一般に幻視というのは、通常の風景の中に自然に幻覚が入り込む
ものらしい。

僕の場合は違う。

幻覚が現れた時、他の部分は完全に色彩を失う。

幻覚の部分にだけ色があり、その他は全てモノクロームに見えるの
である。

音が聞こえなくなることもある。

そういうときには、別の世界を覗いているような気分になる。

下塗りを終え、描き込みも目途がついた時には、午前三時を回っ
ていた。

夕方からおよそ十時間ぶっ通しでキャンバスに向かっていたことになる。

忘れないうちに描こうと思った光景はほとんどキャンバスに乗せてしまい、あとは調整だけとなった。

ここまで描いてしまえばもう大丈夫、と思うと急に疲れと眠気に襲われた。

長時間の集中の後にはどうしてもぐったりしてしまう。

ふと窓から外を見ると、薄く雲のかかった気持ちの良い晴れ空と満開の桜が見えた。

幻視である。

僕はぼうつとした頭で窓を開け、舞い散る花びらの中に手を伸ばした。

そして 寝てしまった。

目を覚ましたのは午前十時だった。

まだ九月とは言え床で寝るには寒かったようで、丸まって寝ていた身体の下になっていた右手がしびれた。

風邪をひいたのか寒気がした。

何とはなしにため息をついて、身体を起こして絵を眺めた。

昨日の自分の高揚がよく分かる。

自分の絵だからということもあるが、絵の様々な部分にその印が見て取れた。

僕の絵には描いているときの気分が反映される。

それは誰かに指摘された訳ではない。

自分でそう思っているだけなのかもしれない。

でも、僕は自分の絵を見ると描いたときの気分を克明に読み取れた。

この絵、この少女の絵には喜びがあった。

それは僕の喜びだが、同時にこの少女の喜びともなっていた。

僕にとって何より嬉しかったのは、少女と目が合ったあの一瞬の表

情、喜びの無表情を達成できたこと　　少なくとも達成できたと思
ったこと　　だった。

夢中で描いていた夜の間、僕はできるだけ少女の顔に表情を出さな
いよう努力した。

それでも描いている僕自身の喜悦が、かすかに少女の顔に読み取れ
たのだ。

この無表情はあの『忘れ得ぬ女』の悲しげな無表情と同様に魅力的
だと、僭越にも僕は思った。

この絵を仕上げるにはまだ時間がかかるだろう。

絵から読み取れる感情をもっと隠す必要があると僕は思った。

人物画は、その人物が見る者の心の中に一角を占めなければ成功と
は言えない。

だから、見る者に何も打ち明けてはいけないのである。

ひどく空腹だったので何か食べようと階下を下りると、キヨさん
がちょうど食事の準備をしているところだった。

キヨさんはその歳にしては珍しく一日二食で済ませる習慣を持ち、
午前十一時ごろの食事をランチ、午後八時ごろの食事をディナー
と呼んでいる。

「あら祐君、いたの？　いつ帰って来たの？」

キヨさんは心底驚いた様子で言った。

僕は昨日帰ってすぐ二階に上り、その後一度も下に下りずにいたの
で、キヨさんが知らないのも無理はなかった。

「昨日の夕方からずっといたよ……絵を描いていたんだ」

「帰ってきたらちゃんと教えて頂戴。ディナーも準備して待ってた
んだから」

キヨさんは不満そうに、しかし優しく言った。

僕はときどきこうしてキヨさんを困らせる。

絵に夢中になると他のことを忘れてしまう。

でも仕方のないことだった。

絵を描いているとき、幻覚を見ているとき、僕には周りの世界は存在しないのである。

キヨさんは何も言わなくても分かってくれていた。だから僕をたしなめることはあっても責めることはなかった。

昨日の夜食べるはずだった食事を温めなおして平らげると、僕はまた部屋に戻った。

早く絵を完成させたかった。

しかし筆を進めることはできなかった。

昨日異常な集中力で描いていたため、その張り詰めた表面の上から描くにはそれなりの緊張が必要だった。

風邪気味で食事直後の僕には絵に向かえるほどの力がなかった。

僕はしばらくぼんやりと絵を見やった後、外に出ることに決めた。できないときにはできないのだ。

忘れ得ぬ女（後書き）

「忘れ得ぬ女」は実在する絵です。
ロシアのモナリザと呼ばれることもあるみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495o/>

クロイツェル・ソナタ・ソナタ・ソナタ 旧盤

2010年11月6日13時31分発行